

創立者の名誉学術称号授与式に同席して（1）

若 江 正 三

ただ今、ご紹介いただきました若江です。創立者池田先生の名誉学術称号300のご受賞をお祝いする記念講演会でお話しさせていただけることは、大変に嬉しく、また名誉なことだと思っております。私は、創大開学4年目の1975年9月、第一回のモスクワ大学訪問、そして翌1976年5月、先生にとって初の名誉学位となるモスクワ大学名誉博士号の授与式に参加させていただき、初代の国際部長として、先生の多大なご業績、すなわち、崇高なる世界の平和と人類の幸福のための戦いを身近に実感させていただいた事柄についてお話しさせていただきます。

皆さんもご存じのことと思いますが、名誉学術称号は、大学や研究所、またはアカデミーなどの高等教育・研究機関が、学術的、文化的、教育的に多大な貢献をした人物に贈呈する最高の荣誉です。英知の宝冠とも言われております。ちなみに私も創大の名誉教授になっておりますが、日本語では名誉教授という同じ名称ですけれども、私の名誉教授は、創価大学に教授として永年勤務し、教育・研究上の業績があったということでいただいたものであり、名誉なことではありますが、英語ではprofessor emeritusとなります。emeritusとは何かと申しますと「引退した」という意味です。先生が授与された名誉教授はhonorary professor（またはprofessor honoris causa）で、まさに名誉ある教授と言うことで意味が違います。ですから、他の大学から名誉教授、あるいは名誉博士などの称号を授与されるということは大変に希有なことであり、大学の教授や研究者の中でも受賞者は、1%にも満たないのではないかと思います。事実、301番目のご受章となったアマゾナス教育科学技術連邦大学からの顕彰の際、フェイトーザ学長は「名誉博士号は、池田博士ご夫妻の永遠不滅の功績を讃える顕彰である」と先生の人類に対する永遠不滅の功績を讃え、ジラス総長は「アマゾナス教育科学技術連邦大学は、（創立）100年という佳節に池田博士をわが学舎にお迎えする荣誉に浴しました」と述べ、名誉学術称号は、受章される人だけではなく、授与する大学、あるいは高等学術機関にとっても最高の名誉であることを示しています。

実は15年くらい前に、就職先開拓のために、私は、関東地方のある地域へ行きました。そして出先からホテルへ帰って、新聞を読みました。全国紙の地方版ですが、その地方の国立大学の教授が、アメリカの大学から名誉博士号を授与されたとの記事が掲載されていました。15年ほど前ですから、この大学は創立から45年ほどであったと思います。その地方の国立総合大学で、開学以来45年で初めて一人の教授があるアメリカの大学から名誉博士号を授与されたということが、写

Masami Wakae（創価大学名誉教授）

*本稿は創価大学創価教育研究所主催の講演会（2010年12月8日）の記録である。

真入りの大きな記事で載っていました。45年間でたった一人ですよ。その授与した大学も、言っ
ては失礼かもしれませんが、私もアメリカの大学にいましたが、あまり聞いたことのない大学で
す。それでも大々的に載るのです。それほど名誉学術称号は、希有であるということです。

ある国立大学で45年の歴史の中でたった一人という名誉学術称号を池田先生は、5大陸の大学
や研究機関から300を超える受章をされているのです。人類史上前人未到のことであり、今後もお
そらくないでしょう。永遠に残る、燦然と輝く英知の宝冠なのです。そして、ご受章の際のスピー
ーチで「この榮譽を創大生一人一人と分かち合いたい、また、先師牧口先生、恩師戸田先生に捧
げたい」ということをよく話されます。それは、牧口先生、戸田先生の人類の平和と幸福のため
という崇高な信念と行動が、池田先生の原点となっておられるからであり、また創立者の後継者
である創大生への大いなるご期待でもあると思います。

牧口先生はご存じのように、当時日本の軍事政権によって弾圧され、獄中死されたのですが、
1903年、まだ32歳のお若いころに、『人生地理学』という本を出版され、世に問うておられます。
1903年という20世紀の初頭において、牧口先生は、20世紀はかくあるべきであると考えられ、そ
の著書の中で、「20世紀において諸国間の競争は軍事競争ではあつていけない、また経済競争であ
つてはならない、人道競争である」と主張されました。すなわち、人類の平和と幸福に寄与する
人間をどれだけ生み出したかというのが諸国間の競争であるべきだと、『人生地理学』に書かれて
いるわけです。

1903年がどういう年であったかといえば、その一年後に日露戦争がはじまります。今、NHKで『坂
の上の雲』というドラマをやっていますが、ロシアに対して、戦争をすべきだという声が日本中
に鳴り響いているなかで、牧口先生は「軍事競争ではない、人道競争である」ということを、著
書の中に書かれているのです。大変な勇気だと思います。

しかし、20世紀はご存じのように、戦争と革命の血塗られた世紀となってしまいました。今日
は、12月8日ですが、何の日か知っていますか。そうです。日本とアメリカが戦争したのです。
日米開戦の日です。1941年12月8日、私は小学校の1年生で、その日の事を良く覚えています。
子どもたちだけではなく、大人もみな喜んでいました。「ついにアメリカと戦った」と。アメリカ
の真珠湾を攻撃して、アメリカの戦艦などを空爆して沈めたものですからみな大喜びでした。

しかし、その後、日本は敗色を濃厚にしていきます。当時アメリカ空軍による空襲は航空機か
ら爆弾を落とすだけではなくドラム缶にガソリンを詰めたものを撒くのです。日本の家屋の多く
は木造でしたから簡単に燃えてしまう、そして子どもを含め、多くの民間人が殺傷されました。
そのような攻撃が増えてきました。それで小学校3年、当時は国民学校と言いましたが、国民学
校の3年生以上は、親類が田舎にある人は田舎に、そうでない人は集団疎開ということになりま
した。私は高座郡相模原町（現在の相模原市）の寺に集団疎開しました。あるとき、私たち集団
疎開の子供たちを慰めるために、手品師とか魔術師とか、そういった人が来てくれました
てね、日本刀を2本、刃を上に向けて並べ、その上をはだして歩いたりするのです。そんなの
を見せてくれました。そして今度は、厚い紙の中に大豆を入れて蝋燭の火の上で、くるくると回す
と、紙は燃えず、生の大豆が炒って食べられるようになります。そしてその人が「この大豆を食

べると特攻隊員になれる」と言いました。特攻隊員ってわかりますか。飛行機に乗って、アメリカの軍艦に体当たりし自爆するのです。敵の船を沈め、自分は死ぬのです。当時、特攻隊員は英雄であり、子どもたちのあこがれでした。私も同じです。手を挙げて「はい、はい、ください」と、みんな豆を貰って食べました。特攻隊員にはなりませんでしたが、そういう教育って恐ろしいですね。小学生が、自分の命を捧げて、死ぬという事を怖がらず、うれしいと思う、そんな教育なのです。自分の命を武器にして人を殺す、人を殺すための教育、そういうものは絶対廃止なくてはいけない。そこで、牧口先生は、人類の平和と、人々の幸福のために役立つ学校を作るというお考えを持っておられ、二代会長戸田先生に託されたのです。今、本学の本部棟5階の展示で、池田先生が学ばれた戸田大学の教科書というのを見てきましたが、万般の学問を良く学ばれた戸田先生ですが、この戸田先生に対して、牧口先生は、「将来、私が研究している創価教育の学校を必ず作る、私の代でできなければ戸田君が作ってくれる」とおっしゃっていたのです。そして牧口先生は獄死され、戸田先生も学校を作ることはできなかったのですが、1950年、戦争が終わってからほんの5年という時に、池田先生に「大作、大学を作ろう。創価大学を作ろう。世界一の大学を作ろうよ」とおっしゃいます。そして「私の代でできなければ、大作、お前が作るのだ」と、こういう風に言われました。池田先生は先師、恩師の思いを実現されるために、創価大学建設、創価一貫教育の構築に尽力されてこられたのです。

1954年の9月、現在大学のあるこの地を戸田先生と池田先生が車で通られて、戸田先生が「この辺に創価教育の城を作りたいな」とおっしゃられ、ここに創価大学ができました。そして、戸田先生は人類を最も悲惨な状況に落とし入れる核兵器の禁止、原水爆禁止宣言を1957年9月に発表されています。池田先生は、師の思いを総て実現しなければならないとの決意で戦ってこられました。ですから、先生は人類の平和と幸せ、繁栄のために尊い生涯を戦い続けてこられましたし、今も戦っておられるのです。

戸田先生の原水爆禁止宣言から11年目の1968年9月、創価学会学生部総会で中国との国交正常化を提案されました。当時、私はアメリカの大学を卒業して、カナダの大学で教えていました。その年の夏休みに帰国し、学会本部にご挨拶にいったところ、「学生部総会があるから参加しませんか」とのお話があり、出席させていただきました。その総会で先生のスピーチがありました。「日本は中国を正式に承認し、国交を正常化する、中国の国連での正当な位置を回復する、そして中国と経済的、文化的交流を推進する」という大きくって3つの点についてのスピーチでした。私は大変驚きました。なぜなら、当時の中国は文化大革命の真っ只中だったからです。文化大革命というのはご存知ですか。全然文化とは関係はない。むしろ反文化です。小中学校の生徒は、教員を集団でつるし上げる。共産党は民主集中制といって上意下達の政党ですが、下部の党員が上部の党員を手厳しく攻撃する。そして当時の劉少奇国家主席や鄧小平副総理等、国家、党の首脳の多くが地方に追放されたり、拘束されてしまう。そういう状態でした。そして仕事を放棄した労働者、農民が北京に集まってきて、『毛沢東語録』という毛沢東主席の言葉の一章句というか、それらを収録した赤い表紙の本を掲げ、毛主席の教えに反するとして党や、国家の中核にいる人々を「走資派」、つまり、資本主義の道を守るものとして糾弾したのです。無政府状態とな

り、荒れすさんでいた時代です。それだけではなくて、中国はソ連と対立している。またベトナム戦争を挟んで、アメリカとも対立して、中国は国際的に孤立していたのです。当時の世界はアメリカとソ連の、いわゆる自由主義（資本主義）陣営と、社会主義陣営との二つに分かれていましたが、そのどちらとも関係がよくなかったのです。中国と仲のよかったのはたった一つアルバニアというヨーロッパの小さな国だけでした。このことは、カナダでもよく知られていましたので、中国と国交正常化という事は、本当に驚天動地の勇気あるご発言であると、驚いたわけでありませう。しかし、状況は徐々に変わってきました、1972年にアメリカと中国が国交を回復し、その7カ月くらい後に、日本が国交正常化をしました。

1974年5月、中日友好協会の招聘を受け、先生は中国を訪問されました。いろんなところを案内されたのですが、ある中学校へ案内されると、中学生が穴を掘っているのですね。それは防空壕で、空から軍用機が攻めてきて爆弾を落とされてもそこに入っていれば、生き延びることができると考え、彼らは、その準備をしていたのです。北京の市内に行くと、デパートの地下にも大きな地下壕、その中には工場も作ることができる、そういう大きな地下街とも言うべき防空壕が作られていて、中国はソ連の核攻撃にも耐えられるのだと言って、いつソ連が攻撃してきても犠牲が少なくなるよう準備を整えているわけですね。レーダーというのがありますが、当時のものは余り正確ではないです。1974年頃のアメリカのレーダーは、シベリアから渡り鳥の群れがカナダを通ってくると、それが航空機かミサイルか、鳥の群れかわからない。そして、そのうち警報がイエローになる。そういうことが年に何回も起きている。近づいてきて、やっどこれは渡り鳥の群れだとわかって、警報が解除される。中国のレーダーはもっと性能の悪いものでしたから、渡り鳥の群れをソ連からのミサイル攻撃だと誤認し、核戦争が勃発する可能性がありました。まさに当時の中国とソ連の間には、そういう緊迫した状況がありました。池田先生はそれを大変心配されました。その頃、ソ連でも平和主義者である池田先生を招聘しようということになりました。コワレンコというソ連共産党中央委員会附属の日本課長で、大変な日本通な方が、中心となって、池田先生の受け入れの準備をします。そして、モスクワ大学が池田先生を招聘することになるのです。先生は、これはもう本当に、中ソの間の戦争、これは大変な戦争になるからこれを止めなければならないというお気持ちでソ連を訪問されます。ソ連には対外文化連合会（対文連）という民間の団体がありました。その対文連の下に日本とソ連の友好協会とか、ソ連とベトナムの友好協会とか、そういう友好協会があるわけです。その対文連というのに対して、日本には日本対外文化協会（対文協）という民間団体があり、その事務局長が、いろいろソ連に関するレクチャーをしてくれました。主として「こういうことをしてはいけない」といった注意事項のレクチャーでした。たとえば、2階より高いところから写真を撮ってはいけない、橋を撮ってはいけない。勿論、軍事施設の写真も撮ってはいけない。スパイに間違えられるからと。ですから本当にある意味では怖い国でした。怖い国だな、注意しなければいけないと思いました。2階から写真を撮ってはいけない、勝手に写真を撮っていて橋が入ったらまずい。事実、第一次訪ソの帰りに、車の中から、写真を撮っていましたら、橋を写してしまったことがありました。そしたら運転手が、何かロシア語で文句を言っていましたよ。通訳の人が、「いや、彼はいいのです」と言

ってくれたと思います。そこでなにもなかったのですが、運転手までそういう教育を受けていました。当時の中国とソ連がいかに険悪な関係にあったということを考慮して、1974年5月の訪中団のメンバーは、池田先生と奥様を除いて一人も同年9月の訪ソ団には入っていないのです。

第一次訪ソの9月のモスクワは、雲一点もない青空で、銀杏のような落ち葉が金色に光って、まるで金貨が空から落ちてくるような、たいへん美しい季節でした。錦秋の、金の秋と言われていたモスクワでした。

1972年9月の日中国交正常化共同声明に、両国はアジア太平洋地域で覇権を求めない、また覇権を求めようとするいかなる国の試みにも反対するという条項があります。1974年当時、この共同声明を基礎にした日中平和友好条約についての話が進められていました。この覇権を求めようとする国はソ連を指すのではないか、このようなソ連を敵視する反覇権条項を条約に入れるべきではない、とコワレンコ課長がテーブルをたたきながら池田先生に迫っているのです。しかし池田先生は平然として、「だからこそ日ソの友好を早く進めればいいじゃないですか。(テーブルをたたいて)手が痛くないですか」と言われたのです。課長は、はっと黙って、そしてニコッと笑いました。険悪な空気が、先生の包み込むようなユーモアで一変した瞬間でした。真の外交を目の当たりにしたように思います。

モスクワ大学に行き、総長室に入ると、たいへん大きくて、そこで会議ができるようになっていました。正面に大きな織物、それはモスクワ大学の本部棟を刺繍したタペストリーで、北京大学からモスクワ大学への贈呈品であると銘記されていました。池田先生は、それをぱっとみられて、「今、この北京大学から贈られた織物を掛けておいても共産党から文句を言われませんか」と聞かれたのです。ホフロフ総長の「国家間、政府間是对立しているけれども、大学間の交流に対立はないのです」との答えに、素晴らしい発言だなと思った事を今でもはっきりと記憶しております。そして、モスクワ大学から交流を結ばないかとの提案があり、「交流に関するプロトコール」の案が用意されていました。プロトコールとは議定書ですね。教員の交換、学生の交換、それから学術書の交換等をこれからしていくための議定書を作ろうということになりました。そして学術交流議定書を交換したのですが、大学間の交流に関する文書に関しては、モスクワ大学との議定書が、創価大学にとっては最初のものでした。

先生は、時間を見つけては、モスクワ大学内を散歩されていました。そこで出会った学生たちに話しかけられる。多くの学生が集まってきまして、和やかなふれあいの場になります。モスクワ大学側には、次の予定があるものですから、合図をするのですが、先生は学生との会話をなかなかおやめになりません。「勉強をしているか」、「何が一番好きか」、「趣味は何か」、などと聞かれました。

当時モスクワ大学の日本語科の教師や学生が通訳としてついてくれました。誰もついてくれない夜でも「散歩に行こうじゃないか」と先生がおっしゃって出かけたこともあります。もう先生の足の速いこと速いこと、タッタッタツといかれて、信号が赤だと先生が止まって手をさつとあげられ、我々は後ろでぱつと止まるんです。道行く人たちにどんどん話しかけられて、庶民との交流、そして庶民がどういう事を思っているかという事を積極的に聞かれましたね。

次は、クレムリンに行ったときのことですが、ロシアの政権の中核で、そこに入りまして色々見ると、まあすごいですねえ、銃器庫という名の建物がありました。その中に銃などの兵器ではなく、世界の各国から、当時のロシア帝国の皇帝に贈られた宝物などが飾られていました。明治天皇からの贈呈品もありました。クレムリン宮殿の壮大で美しいことには驚嘆を禁じ得ませんでした。その中にウラジミールの間と、グレゴリーの間という二つの立派な大理石でできた部屋があります。レーガン大統領とゴルバチョフ大統領が米ソの和解で共同会見した場所です。なぜウラジミールあるいはグレゴリーの間と呼ばれるのかというと、ロシア帝国にウラジミール勲章とグレゴリー勲章という二つの最高勲章があり、その名前が由来となっているとのことです。その大理石の壁面に、これらの勲章を受けた人や団体の名称が刻まれているのです。私は団体が勲章を受けるなんておもしろいな、などと思って見ていたのですが、先生は「そうだ、これはいいな」といわれて、帰国されてから、創価大学一期の卒業生から全員の銘板を作るという事を決められました。先生はどこにいらしても、創大生や創価学会の方がどうすれば喜ぶか、また称えられるかという事を考えておられるのです。創価学会の会館でも当時の学会員の名前が、全部銘板として残っていますよ。私は感動しました。こちらはそうしたものを漠然とみているのに、先生はそういうことにヒントを得て、どうすればみんなを称えられるかという事をあらゆるところから考えていらっしゃるのです。

そして、あの有名なコスイギン首相との会見になるわけです。コスイギン首相の「池田先生のイデオロギーは何ですか」との問いに、先生は「平和主義であり、文化主義であり、教育主義であり、その根底は人間主義です」と明快に答えられたのです。人間を大事にする善なる心、そして、人間一人ひとりが人類に尽くすことができる能力、このことを信じ、大事にする。それが人間主義ですね。

先生は質問されました。「中国に行ったら防空壕を作っている、ソ連は必ず攻めてくると中国は思っている。ソ連は中国を攻撃するのですか」と。首相は「ソ連は中国を攻撃するつもりもないし、中国が今のように孤立しているということも望んでいない」と答えるのですね。そこで「このことを中国の首脳に伝えてもいいですか」と。その3ヶ月後、先生は中国に行かれ、鄧小平副総理らにこの話を伝えるわけです。ある意味で、ここが、中国とソ連との間の緊張が緩和される、そういう、核戦争になるかもしれない状況を押し止めることになった分岐点ではなかったか、と私は思っております。やはり自分の心から、本当に、人々の善なる心信じて、話し合うときに、人々は戦争を望んでいないし、平和を求めていることが理解されるのではないのでしょうか。そして翌年、先生は訪米されキッシンジャー国務長官と会見されます。キッシンジャー長官は先生に「どの国を支持するのですか」と聞きましたが、先生は「中国の味方でもない、ソ連の味方でもない、アメリカの味方でもない、私たちは平和勢力です、人類に味方します」と答えられます。アメリカの味方でもあり、中国の味方でもあり、ソ連の味方でもあるのです。人類の味方、平和の味方です。先生の、米中、米ソ、米中ソ間の緊張緩和に対するご活躍というのは大変なものとあと思っています。必ずや歴史が証明します。

1975年の4月には中国からの初めての国費留学生が創価大学に来ました。今なら中国の留学生

は大歓迎ですが、当時は日本と中国では教育制度が違って、日本は12年間教育を受けなければ大学に入れないのに対して、中国では、文化大革命で教育制度がバラバラになり、高校を卒業するのに10年、11年あるいは12年かかる。中国の教育制度が分からないからという理由で日本の大学が引き受けないので。正規の聴講生ではなく、日本の大学の先生が個人的に自分の研究室に呼んで日本語の教育をしていたという事はありませんが、正規の留学生として受け入れたのは、皆さんご存じのように創価大学が最初ですね。最初に来た6人の内一人が現在の程永華駐日大使です。身元保証人は池田先生です。先生は留学生の到着を待たれ、彼らの到着後、キャンパス内をご自身でご案内され、「これは桜です」、「これは何ですか」と、日本語教育までされていました。

中国側の留学生担当であった金蘇城一等書記官が大学内を見学され、今はもう無くなりましたが体育館の裏に、生活協同組合とか学生自治会の建物があつたのですが、その一室にロンドンという名の喫茶室のような、コーヒーを飲んだり、サンドイッチを食べたりするところがありました。それを見て金書記官は「我が国の留学生を、ここに入れさせないようにしてください」と。とんでもない墮落だということです。中国がそういう厳しいすごい時代でしたね。ですから、そういうこともいろいろあり、またスチューデントパワーの時代で、キャンパス紛争が起きているときですから、共産国から留学生が来たらどうということになるかもしれないという事で、日本の大学は受け入れませんでした。それを創価大学がただ一つ受け入れる、中国側も周総理が先生を信頼されて、先生が身元引受人になって留学させたわけです。身元引受人がないと日本に留学できない時代だったのです。

そして一カ月後の5月に、先生はソ連を再び訪問されます。5月は本当に美しい季節で、木々が緑で、大変美しいモスクワでした。今度は、先生が平和の活動に尽力されていることをソ連の人たちが良く理解していて、第一次訪ソでは招待したのはモスクワ大学だけだったのですが、第二次訪ソではモスクワ大学、ソ連対外文化交流団連合会（対文連）、ソ連作家同盟、この3つが先生をご招待する主催者になったわけです。そしてコワレンコ日本課長が、「池田先生は命の危険をも顧みず、常に平和を主張し、人間と人間の友好のために行動され、核兵器を悪魔の兵器と断言する、画期的な平和思想の持ち主です。」と、こういうことを先生に直接言っていました。ソ連は核兵器を持っているのですよ。勇気ある発言であったと私は思いますが。多くの人々が先生に対する時、自己の善なる心が出てくるのですね。私たちも対話する人が善なる心を出してくれる、そういう人格になっていかなければならないと思います。

レーニンが執務したモスクワ郊外の町へ行ったことがあります。レーニンが晩年に執務したという場所です。向こうでは靴を脱ぐという習慣がありませんので、この場所を大事にするために、ビニールの袋を靴の上にはきなさいと言われました。そして、レーニンが死去直前まで執務していた部屋を見学しました。そこではいろいろな人が訪ねてきていましたが、先生は真っ先に子どもたちと対話されて、未来を担う子どもたちに話しかけられておられました。

そして、5月27日、モスクワ大学から第一号となる名誉博士号が池田先生に授与されたのです。場所はモスクワ大学の大きな総長室です。はじめに先ず哲学部長が立ちあがって、「池田先生、平和活動の指導者、詩人、文学者である池田先生をモスクワ大学の名誉博士に推薦したい」と提言

しました。次に、歴史学部長が、ククーシキンという教授で創大に来たこともある人ですが、「賛成である」と続きました。そして、先生に名誉博士号が授与されたのです。当時先ほど話したように、世界が二つの陣営に分れていました。自由主義諸国と社会主義諸国ですが、その社会主義諸国の最高の大学がモスクワ大学です。すなわち、ソ連だけではなく、学術研究においても教育においても社会主義諸国全体の中で最高の大学ですね。その大学から池田先生に名誉博士号が贈られたのです。これは大変なことです。モスクワ大学は、細菌学のパストゥール、進化論のダーウィン、さらにゲーテやシラー、政治家ではネルー首相や周恩来総理など、世界史に残る人々に名誉博士号を授与しています。池田先生の第一号の名誉博士号が、世界を二つに分けている一方の陣営の最高の大学からの称号でした。大変感動的な場面でした。さらにトロービン副総長（国際担当）が記念の会食会で立ちあがって、「モスクワ大学の名誉博士は、名誉哲学博士や、名誉文学博士等のように一つの学部からのものではありません。全学部からの博士号なのです」と話されたことも忘れられません。

そして、記念講演は、モスクワ大学の文化宮殿で行われました。大学の中に文化宮殿という名前の立派なホールがあるのでですね。

池田先生は記念講演として、「東西文化交流の新しい道—精神のシルクロード—」という講演をされています。民族や体制やイデオロギーの壁を乗り越え、人間と人間の心を結ぶ、精神のシルクロードを作っていかなければならないというスピーチです。「民衆同士の自然的意思による交流、政府と政府ではなく、民衆と民衆の交流の中に、不信を信頼に変え、反目を理解に変え、この世界から戦争という怪物を駆逐し、真実の永続的な平和の達成を可能にする」、こういう事を言われました。当時、ソ連は、15の共和国からなる連邦、すなわち連合国家でした。さらに、120を超える民族を抱えていました。また、領土の半分はヨーロッパ、半分はアジアでしょう。ですからアジアの心もヨーロッパの心も、それから南の心も北の心も理解できるわけです。人類の平和にとって、ソ連の役割は重大であるというお話をこの中でされております。

そしてその後、総長室で、学術交流協定書（第一次訪ソでは議定書）が結ばれ、教員の交換、学生の交換が実現するわけです。その第一号留学生としてモスクワに派遣された斎藤えく子さんが今は素晴らしい通訳となっています。日本で屈指のロシア語の通訳だと思えます。またロシア外務省のガルージン第三アジア局長は、モスクワ大学から創大が受け入れた留学生の一人です。

第一回ソ連訪問の最後のお別れに、モスクワ大学側が、森と湖に囲まれたモスクワ郊外のレストランに招待してくれました。我々が少し早く着いたため、モスクワ大学側はだれもいなかったのです。すると池田先生は湖に向かって歩かれました。そこには、一人の老人が釣りをしていました。貧しい服装の老人です。先生は、その人と色々話された後に「今あなたが一番欲しいのは何ですか」と聞かれました。するとその人はすぐに「平和です」と言いましたね。「ロシアのほとんどすべての人が、その親族の中の誰かが第二次世界大戦の犠牲者となったという悲しい経験を持っています。ですから、平和が一番ほしいのです」と。誰から言われたのでもない、強制されたのでもない、釣りをしている一人の老人、今の私より若いと思いますが、その庶民の正直な言葉に、いずれの国であろうとも庶民の声は強く、正しい。先生が一番正直な声を聞かれておら

れる。この声を大きくしていくなら戦争はおこらないと確信しました。当時米ソの戦争も考えられる状況でしたし、いつ核戦争が始まるかと、時計の指針が、12時になると核戦争が起こるとすると、11時50分くらいまで来ているような世界の緊迫感でした。絶対に平和は守らなければならないという思いを強くしました。

先生は、7000人を超える世界の学術、教育、文化、政治の指導者と会見されています。その対話の席に出席させていただいたことがあります。先生は、対話する相手の方の祖父母、父母、あるいはその国の歴史上の人物に関して多くの知識を持っておられます。その上で、「父君はどのような方であったか」、また「母君は」、あるいは「尊敬する方はどなたですか」など、質問を多くされます。このような質問を通して、対話は弾み、深い生涯の友情が結ばれるのです。

創価大学の入学式、卒業式、あるいは創大祭等の機会に池田先生に対する名誉学術称号の授与式が行われてきました。授与のため大学の総長あるいは学長が来学されます。先生のスピーチを聞き、「池田先生は学生一人一人と対話されている。1対2000、1対3000ではなく、学生一人一人と心がつながっている、そのことが感じられる今日のスピーチでした」、「先生は、我が国の歴史について該博な知識をお持ちになっておられる」と多くの方々が感慨深く話しておられました。シルクロードの大詩人と呼ばれるアリシェール・ナワイーは、ウズベキスタン共和国が世界に誇る民衆詩人であり、哲学者ですが、日本では余り知られていません。池田先生が、スピーチでナワイーについて話されたことが縁となり、ウズベキスタン政府から、その銅像が創価大学に寄贈され、池田講堂前に設置されました。

国家の体制、形態はいろいろありますが、先生の続けられる文化、宗教、民族の差異を越えての人間対人間の対話の道こそが世界を平和に、人々を幸せへと導く確実な方法であると深く確信します。先生の人類の歴史上燦然と輝く300のご受賞を心からお祝い申し上げ、話を終了させていただきます。ご静聴ありがとうございました。